

伊東俊太郎における「自然」に関する研究

——人類史の五大革命説を手がかりに——

竹中 信介

目次

- 一 はじめに
- 二 人類史の五大革命説と自然観の変遷
- 三 「環境革命」における自然観の変革の必要性
- 四 到達点としての「宇宙連関」という思想——日本の自然観への期待——
- 五 おわりに

一 はじめに

学校法人廣池学園および公益財団法人モラロジー道德教育財団に長年関わられた、比較文明学の泰斗で麗澤大学名誉教授・東京大学名誉教授の伊東俊太郎（一九三〇～二〇二三）先生（以下では敬称を略させていただきます）のご逝去から令和六（二

〇二四）年九月二十日で九一年となったが、筆者はいま伊東の生涯と思想を振り返り、その志と学問を継承してゆく必要性を強く感じている。本稿では、その端緒を開くために、伊東の比較文明論の中核的主張である「人類史の五大革命説」について検討するところから議論を始めたい。ついで現在進行している第六の「環境革命」に関する伊東の見解、そして晩年における到達点としての「宇宙連関」の思想について考察する。伊東の研究全体を通して特に注視すべきポイント、キーワードは「自然」であると考えるのだが、この語は、法学博士の廣池千九郎（一八六六～一九三八）および廣池が創建したモラロジー（Morality）の思想、さらには現代社会・現代文明の在り方を考察するうえでも外すことができない重要なものである。

本稿では、紙幅の関係で以下の議論を行う余地はないが、今

後は廣池における「自然」の研究についてまとめ、さらに伊東が廣池およびモラロジーについて評した文献を精査し、両者の比較思想的考察を試みたいと考えている。その全体的な構想について触れておくと、自然（環境）と道徳（倫理）との関わり合いについて考察し、「生命の連絡」「相互扶助論」（廣池）、「宇宙連関」「ともいきのきずな」（伊東）といった諸概念の相互比較を行う予定である。それらの考察をとおして、現在人類規模の課題として浮上している地球環境問題の解決への示唆を提供することができると思われるのだが、「世代間倫理（intergenerational ethics）」や筆者が提唱している「継世代倫理（the transgenerational ethics）」の視点からも考察してみたい。

本稿は上記のような研究構想を実現するための土台という意味合いがあることを確認して、具体的な考察に移ろうと思う。

二 人類史の五大革命説と自然観の変遷

伊東は、人類の歴史には、五つの大転換期——「人類革命」「農業革命」「都市革命」「精神革命」「科学革命」があったと捉えている。ここでは、このそれぞれの段階の特徴について概説するところから始め、そのうえで人類の自然観がどのように変遷してきたのかを跡づけてみたい。

（一）「人類革命」（人類の成立）とその時期の自然観——トーテミズムとプレアニミズム——

第一の「人類革命（Anthropic Revolution）」とは、類人猿のあるものが恒常的に直立二足歩行を開始して、人類へと進化した転換期を指し、「人類の成立」をもって、その特徴となす¹。では、その年代はいつ頃なのだろうか。伊東は、世界の人類学の研究成果を手がかりに、常に最新の情報を取り入れて年代に修正を加えてきたが、最晩年の『人類史の精神革命』では、人類誕生の年代を七百万年前²としている（伊東二〇二二、一七頁）。「人類革命」の他の特徴については、手による道具の製作、有節言語の形成、大脳の発達、石器などによる人類文化の形成が挙げられる。

さて、それでは、この時期における人類の自然観とは、どのようなものであったのだろうか。伊東の著作『文明と自然——対立から統合へ——』（刀水書房、二〇〇二）の第Ⅰ部第二章において、この問題が詳しく検討されているので、ここではその記述を参照することにした（以下の革命も同様）。伊東は、この人類革命が長期にわたるものであることを念頭に、自然観をまとめて語ることの困難さを踏まえたくうえで、以下のように述べている。

「人類革命」以後、紀元前一万年ころに始まる「農業革

命」までの、いわゆる旧石器時代の人類の生業は、狩猟・採集・漁撈であったことは間違いない。そこでは彼らは周囲に存在する動物や植物と共存する生活をすごしていた。すなわち彼らは自分たちを、動植物や森や川と同じく、彼らをとりにまく自然の一部と考えていた」(伊東二〇〇二、三二一～三二二頁、太字と下線は筆者による(以下同様))

ここで伊東は、人類の生業(狩猟・採集・漁撈)に注目することで、自然(動植物)と人間の一体的な在り方を指摘している。続いて、次の説明が注目される。

「このような自然と親密に生きる彼らの自然観の基底をなすのは、動物や植物との一体化であり、ここに最古の宗教形態であるトーテミズム(totemism)が成立する(デュルケム、一九四一―四二)³。トーテミズムとは「ある社会の集団が動物や植物の特定の種と特殊な関係にあるもの」(ラドクリフ・ブラウン)であり、この動植物の種をその集団のトーテムと呼ぶ。つまり自分たち民族の祖先が熊や鳥であったとするのである。これはその動物や植物との特別の親縁性を示すものであり、それを民族のシンボルとすることによって、自らも聖なる自然のなかに場所を占める」(伊東二〇〇二、三二一～三三三頁)

この部分の指摘は、宗教学や宗教社会学、比較宗教学といった分野における古典的かつ定説的な知見(トーテミズム)が参照されており、より説得的な説明であると考えられる。人類と動植物(自然)の連続性が学問的に明らかにされているわけだが、人類革命期の人類の自然観の基底をなすのは、「トーテミズム」(プレアニミズム)である、という説明である。

(二)「農業革命」(農耕牧畜の開始)とその時期の自然観―ア

ニミズムと大地母神―

第二の「農業革命(Agricultural Revolution)」とは、人類による農業の開始を画期とするものであり、食糧確保の手段の抜本的な変革をその特徴とする。つまり、この時期に、それまでの受動的で自然的な「採集・漁撈・狩猟」という手段から、能動的で人為的な「農耕・牧畜」という手段への転換がもたらされたのである。この時期の人類による自然への介入の度合いは、それまでとは比べものにならないほど大きく、ここにおいて環境破壊、つまり「環境問題」の萌芽を見ることも可能である。しかしながら、後に言及する十七世紀の「科学革命」期以降の地球規模での環境問題と比べればその範囲が地域限定的であり、そして規模においてもより小さいものであったと言えることができる。

ところで、「文化(culture)」という言葉はラテン語の「耕

すこと (cultural) に由来するが、何を耕すのかと言えば、もちろん「自然 (nature)」「大地 (earth)」をである。このことから、農耕とは、文化の一つの起源であると考えられ、また他の文化的さらには文明的営為を生み出すことになった人類史における重要な契機と言える。しかしながら、人類が、「自然」に対する人為的介入、つまり自然破壊 (による食糧確保) という手段を学んでしまった事実には注意を払っておく必要がある。⁴⁾

ここで議論を本筋に戻し、「農業革命」がもたらした副産物について確認しておきたい。伊東の説明を参照してみると、以下のとおりである。

「このこと (筆者註…農耕・牧畜による食糧の能動的人為的生産確保) により、家をつくり村落を形成し、一定の場所に定住して土器、織物の製作をはじめ、さまざまな文化を蓄積した。いわゆる「衣食住」の基本はこのときにつくられたのである。それは人類が安定した生活活動を行うことができるようになり、人口も増大した大転換期であった」(伊東二〇二二、一八頁)

家、村落、土器、織物など、いわゆる「衣食住」の基本となるものが、「農業革命」によって人類にもたらされたのである。⁵⁾

衣食住には、まさに地域ごとの「文化的」な差異が出てくるものであり、やはりこの農業革命期において、世界の各地において「文化」が開いたという見方をすることが可能であろう。それでは、この時期の人類の自然観は、どのように変わったのであろうか。ここでもやはり伊東の説明を参照したい。

「ここにおいて人間ははじめて食糧の人為的生産確保の営みを始めた。それ以前の段階における人間と自然との聖なる一体性の感覚に比べるなら、両者の間には一定の距離が生じた。すなわち、人間は自然の一部であるばかりでなく、自然を操作し改変するものとなる」(伊東二〇二二、三三頁)

ここで注目しておくべきは、自然と人間の間に一定の距離が生じたこと、人間が自然を操作し改変する術を手に入れたこと、の二点である。次に以下の文章が注目される。

「ここでは何よりも大地の生産力を維持し高めることが目指された。すなわち周囲の自然の生命力、霊力と交流し、それを活性化することが必要である。彼らは周囲の自然物のすべてに、ある種の靈魂の存在を認め、それに供物を捧げ、豊饒を祈願する。「万物に靈魂 (souls) あるいは

精霊 (spirit) が宿る」とする考えが、タイラー (Edward B. Tylor) の定義したアニミズムである (タイラー、一九六二)。⁶⁾ 〈中略〉／自然の、そして大地の生命力を高めることを目指したことは、同時に「大地母神 (Earth Mother)」の信仰を生み出した。大地は女神にたとえられ、妊娠は穀物の種に隠された生命の再生を象徴する」(伊東二〇〇二、三四頁、〔 〕は改行を示す (以下同様))

人間は、自然の生産力を維持・向上させるために、自然物すべてに靈魂の存在を認め、供物を捧げて豊穰を祈願した。これはタイラーの「アニミズム」に基づく考えである。同時に「大地母神」の信仰が生まれ、妊娠が生命の再生を象徴するものとされた。この時期は総じて、ある意味において「人間」の生存・発達のために「自然」が利用される段階であったということができらるだろう。

(三) 「都市革命」(都市文明の出現) とその時期の自然観―神話の世界―

第三の「都市革命 (Urban Revolution)」とは、前記のような農耕がきわめてよく発展し、豊富な余剰農作物が蓄えられ、もはやすべての人口が農耕に従事する必要がなくなった地域に都市がつくられ、その中に農民とは区別される都市民が新たに

形成される変革を指す。そこでは、余剰農作物を管理・支配する政治的な王が出現する。そして、その周囲に僧侶や書記のような管理者、蓄積された富を周囲の異民族の略奪から守る戦士、さらに特殊な製作活動や交易を行う職人や商人のような、直接に農耕に携わらない社会階層が、市民として神殿を中心として周囲に城壁をめぐらした都市の中に居住し、ここにそれまでの農耕文化とは区別された都市文明が誕生する。都市文明を特徴づけるものは、王権と原初国家機構の成立であり、社会階層の分化であり、金属器使用であり、商業の勃興であり、さらに多くの場合、文字の発明を伴う。そのため、数学、暦学、医学などの基礎的な知的装置も開発され、記録されるようになる。また、以下でも見るように、重要な要素として、この都市文明の精神的統合の原理として、初期宗教の体系、そして神話が生み出されてくる。

さて、この段階まで来ると、「自然と人間との関係」も一段と際立った変化を被っていることが予想されるが、この時期の自然観はどのようなものであったのだろうか。以下の伊東の記述を参考に考察してみよう。

「人口稠密な地縁集団 (それはもはや血縁集団ではない) である都市民と、それをとり囲む農民を集中的に管理し、精神的に統合してゆくために、文字が発明され、たんなる

アニミズム以上の神話の体系がつくりだされる。この神話の体系が王権の支配を保証するのである。そして自然はこうした人格的・个性的な神々のドラマの舞台となる。それらの神々は一つのシステムをつくり、最高神のもとに統一され、それが王権と結びつくのである。この都市形成はレングを焼き、木材を多量に消費し、森林を伐採し、人為的な自然破壊を農耕以上に進めた（農耕も一種の自然破壊であるが、それはまた別種の自然をつくり出したともいえる。都市形成はそうではない）」（伊東二〇〇二、三五―三六頁）

まず、単なるアニミズム（感性的自然観）を超えた、ある種の理性（文字）に基づく神話の体系がつくりだされたことが注目され、ここに自然と人間との間の距離が一步開くことになる。さらに、都市を形成する際に、森林を伐採したことが決定的に大きな出来事であり、まさに人類史において環境問題（人間による自然の破壊）が大きくクローズアップされた瞬間であろう。文明（civilization）とは、都市（civitas）化を意味するわけだが、それはとりもなおさず、文明が都市化＝自然破壊の産物であることを含意している。このように、都市革命期において、狭義の文明が誕生したと言えるのだが、「自然と人間との関係」も大きく変容し、自然観の在り方にも大きな変革がも

たらされたと言うことができる。

（四）「精神革命」（哲学と世界宗教の誕生）とその時期の自然観―パンピュシズムの世界―

第四の「精神革命（Spiritual Revolution）」とは、前六世紀から紀元一世紀にかけてギリシア、中国、インド、イスラエルの地域に同時並行的に生じた人間精神の内面的変革を意味し、人間の精神史の始まりを画した大転換期である。人類史における哲学と世界宗教の成立であり、具体的にはギリシア哲学、儒教、仏教、キリスト教の形成を示している。その中心的人物は、ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの四者である。

ここでは、それぞれの内面的原理を詳しく記すことはしないが、その要点を記すと、ギリシアにおける「精神革命」は、ソクラテスによる「プシューケー」（魂、精神）の発見に始まり、この「魂」の対象となる「イデア」の認識を経て、ついにその最高のものとしての「善」のイデアの把握に至る。次に、中国における「精神革命」は、周の時代の「天」が地上に引き下ろされて人倫化されて「道」となり、孔子の儒教においてそれは当初「礼」であったが、その「礼」の根底に「仁」がなければならぬことが見抜かれて完成に至る。インドのブッダにおいては、この世の「苦」の問題から出発して、その苦のもととなる「執着」の対象が、実は常に変化して止まない実体のない

「縁起」つまり「空」にほかならないことが自覚され、そこから「慈悲」が出現する。最後に、イスラエルでは、まずイエスによりユダヤ教における律法概念とその形式化が、徹底的に批判され、それを超えた直接的な神の「愛」が強調されて、人々の真の救済へと向かう（この段落の記述は伊東二〇一八 a bを参照）。

それでは、この精神革命期における自然観について検討してみたい。以下の伊東の説明が手がかりになる。

「古代ギリシアにおいては、死せる自然ではなく、内に生成発展の原理をもった生命ある有機的自然が自然の原型であった。そこでは自然はなんら人間と対立するものではなく、人間も理性的靈魂をもつものとしてではあるが、そのような生命的自然の一部に包み込まれていた。神ですら自然を超越するものではなく、「第一質量」に対峙する「純粹形相」としてこうした存在の発展段階の最後に位置するものに他ならない。結局古代ギリシアにおいては、自然は人間や神をそのうちに包みこんだ生ける統一体であり、すべてが「ピュシス」に包まれるという意味で、筆者はこれを「パンピュシズム」と呼んでいる。／「精神革命」以後の中国哲学やインド思想における自然観は、さまざまなバリエーションがあるとはいえ、本質的には、神・

人間・自然を一体的に包むこうしたパンピュシズム的構造を共有していたと思われる。第四のイスラエルに発したユダヤ・キリスト教の伝統のみが、このようなパンピュシズム的構造を切り捨てたことが注目される」（伊東二〇〇二、三八頁）

ここでは、特に古代ギリシアの自然観を例に説明がなされているが、その特徴が、神と自然と人間の一体性として捉えられ、そのことが「パンピュシズム」と呼ばれているのが興味深い。伊東は後に、「精神革命」における人間中心的原理を批判し、残された問題としての「自然」を考察する必要性を主張した（伊東二〇一〇、二〇一）が、この著作の段階（二〇〇二年／この部分の記述の初出は一九九六年）では、精神革命期における「自然」についての思想・哲学を積極的に評価している。その意味では、いま再びこの著作（『文明と自然』）を読みなおす意義があるように思われる。

そして最後に、ユダヤ・キリスト教の伝統が批判されるに至っているわけだが、このユダヤ・キリスト教の自然観が、次の「科学革命」を下支えする思想的・形而上学的源泉であるのである。それでは、次にその「科学革命」の内容の検討に移ろうと思う。

(五) 「科学革命」(近代科学の形成) とその時期の自然観—機械論的自然観—

第五の「科学革命 (Scientific Revolution)」とは、十七世紀の西欧において生じた近代科学の形成という事実を指すものである。これは、ここまでの四つの革命とは違い、西欧においてのみ生じたことがポイントである。この科学革命は、アリストテレス以来長く続いていた世界観、生命観、物質観を根本的に変え、今日の宇宙時代、核時代に連なる近代の科学文明の基礎を作りあげた。それは当初、西欧に発し、やがて全世界に広がり、その知的・物質的状况を一変させ、世界的な規模で人類史の五番目の大転換期となったのである。その担い手は、フランス・ベイコン (英)、ルネ・デカルト (仏)、ガリレオ・ガリレイ (伊)、アイザック・ニュートン (英) らである。この「科学革命」の思想的基盤をなすのが、デカルトの「機械論的自然観 (mechanistic view of nature)」であり、ベイコンの「自然支配の理念 (the idea of dominance over nature)」である。

この科学革命には、第二期と第三期があり、それが十八世紀後半の「産業革命 (Industrial Revolution)」と二十世紀後半の「情報革命 (Information Revolution)」である。この三つの革命はひとつながりのものとして捉えることができる。さらに、伊東自身の説明のなかでは明言されていないが、現在は、より現代的な「AI (人工知能) 革命 (Artificial

Intelligence Revolution)」を第四期として位置づけることが可能ではないだろうか。

ここまでの記述からでもわかるとおり、科学革命期において「自然と人間との関係」は様変わりしたと言ってよいだろう。論点の先取的に、デカルトとベイコンの自然観に触れたが、総じてこの科学革命期の自然観について、伊東の説明に耳を傾けてみようと思う。まずは、科学革命期の自然観の源泉となった中世キリスト教世界における「神と自然と人間」の位置づけを確認しておきたい。

「中世キリスト教世界にとり入れられた後、「ナートウラ」としての自然は、ギリシアの「ピュシス」としての自然とは大きく異なる位置をもつこととなったことが、まず注目される。つまりさきに述べた「パンピュシズム」の神・人間・自然の一体性は破れて、かわって神—人間—自然という截然たる階層的秩序が現れてきたのである。そこでは人間も自然も神によって創造されたものであり、神はこれらのものからまったく超越している。人間も自然も同格のものではなく、むしろ自然の上にあって、これを支配し利用する権利を神からさずかっているものとされた。〈中略〉こうした中世キリスト教世界の自然観は、十二世紀のシャルトル学派を通し、ロジャー・ベイコンを経て十

七世紀のフランシス・ベーコンの「自然支配の理念」において、はっきりした形をとる。すなわち自然を人間とは独立な第三者としてこれを客観化し、このまったくの他者、対立者に対し、外からさまざま操作を加え、「力としての知」によりこれを分析利用しようとするのである」（伊東二〇〇二、三九〜四〇頁）

もともとラテン語の「ナートウーラ（自然）」はギリシア語のピュシスと同様、「生まれる」（ナースコル）という動詞から出ているわけだが、中世キリスト教世界では、そのニュアンスが失われ、「神—人間—自然」という階層的秩序が生まれてしまい、それが近代における「自然支配の理念」（ベイコン）に直結してしまったのである。そうなれば、自然からは「生命」や「意識」といった要素が取り除かれてしまい、自然を「機械」と同様なものとしてとらえる発想に至ってしまう。それを徹底したのが、デカルトの「機械論的自然観」である。それでは、デカルトおよびベイコンの功罪とは何か、そしてそれらが近現代の文明社会にもたらしたものは何であったのか。そのことについての伊東による説明が以下である。

「デカルトによつて創始された「機械論的自然観」と、さきにふれたベイコンの「自然支配の理念」とが、あたか

も車の両輪のごとく結びつき、近代の科学技術をおし進めてきた。それはたしかにこれまで大きな成功を収め、今日の科学技術文明を出現させ、自然の上に「人間の王国」（ベイコン）をつくり上げることに貢献した。しかしそれが同時に現代における大きなジレンマを生み出している。なぜなら他ならぬこの近代の「機械論的」「自然支配的」自然観が、公害や環境破壊や資源枯渇のみならず、こうした環境や資源とともに生きる人間の破壊—しかも物質的のみならず精神的破滅をもたらしかねないものとなっているからである。今や自然観においても、そのなかに「生命」があるべき場所を回復し、そこにおいて人間と自然との関係が根本的に再定位されるべき転換期に出会っているのである」（伊東二〇〇二、四一頁）

「科学革命」が我々人類の生活を豊かにし、社会的インフラを整え、文明国としての進路を決定づけたのは間違いないが、その反動として、自然からの手痛い「しっぺ返し」が人間に対して猛烈な勢いで迫っている。文明国における人間存在は、物質的・精神的に「いのち」の危機にある。ここに、新たな自然観、そして生命観の創出への期待が高まるのである。

三 「環境革命」における自然観の変革の必要性

現在は、人類史における第六の変革期である「環境革命 (Environmental Revolution)」を迎えており、また変革が求められているというのが伊東の主張である。筆者自身も、その見解に同意するものであり、その内実を問う必要があると考ええる。まず環境革命についての概略について確認したあとに、具体的な自然観、人間観、世界観の変革について考察してみようと思う。

伊東は、現代のいわゆる「環境問題」は、今日の我々が抱えている問題の一つというよりも、むしろそうした諸問題の根源をなしているという見方を示している (伊東二〇〇二、四八頁)。「この第六の変革には、これまでのように環境が関連している、というに止まらず、まさに地球環境問題こそが、この文明の変換を主導するもの」(伊東二〇〇九、三三二頁、傍点原文)であり、「今や環境問題は、現代人の抱えている諸問題の一つというよりも、今日の文明の様相を根本的に変えさせる根源となっているべきである」(伊東二〇〇九、三三一頁)と云うのである。これを筆者なりに受け取りなすと、これまで「地球環境 (自然)」は、人間存在にとつて、あくまで「対象」もしくは「客体」としての位置づけであったわけだが、これからはまさに「主体」として位置づけ接していかなければならな

い、という意味に解釈できると考える。

そのうえで、以下の伊東による「環境革命」の必要性についての説明を確認したあと、環境革命の具体的な方向性について検討していきたい。

「現在はこうした科学技術文明の進展により、多くの利便を獲得しつつも、同時に人類の全体的破壊をも可能にするような環境破壊や核の脅威や資源枯渇などを現出させ、人類はまた「科学革命」以来の第六の大転換期「環境革命」(Environmental Revolution)の時代を迎えているといえよう。ここでは「科学革命」以来の「機械論的世界観」や「自然支配の理念」が問い直されると同時に、自然を排除した人間中心的な従来の宗教のあり方も再検討される必要があるであろう」(伊東二〇〇九、二四八頁)

ここでは、世界観、人間観、自然観、宗教観の問いなおし、あるいは転換の必要性についての主張が展開されているが、次に、その中身について、伊東が示している三つの柱——①「叡知革命 (Sapiential Revolution)」②「生世界革命 (Bio-world Revolution)」③「人間革命 (Human Revolution)」に沿って確認していきたい (伊東二〇〇二、五〇～五九頁)。

(一) 「叡知革命(Sapiential Revolution)」——科学技術の変革——

「叡知革命」とは、従来の科学技術の在り方を根本的に変革し、科学を単なる「知識のための知識」から、人間生活や地球環境全体との関係性を考慮した「叡知」へと転換させることを意味する。科学革命以降、それまで「倫理や宗教」といった人間的諸活動と密接に結びついていた「科学」が、人間生活や社会から次第に乖離し、科学そのものが「善」であるという暗黙の前提が共有されてきたが（科学の「囲い込み」現象）、戦争や環境問題などによりその前提は崩壊した。現代の科学技術には、例えば毒ガスや原子爆弾などの化学兵器、そして原子力発電など人類の存続を脅かす破壊力が潜んでおり、そのため科学は、「真偽」だけでなく健全性、すなわち環境や人類にとって適合的かどうかという評価基準を持つべきであるとされる。ここに、いわゆる「科学の倫理学」（伊東二〇〇七、二〇一三）という課題が浮上するわけである。

「科学 (science)」はその言葉が示すように、知識——スキエンティア (scientia) として出発したわけだが、地球環境問題をはじめとして、科学が地球（自然）や人間に与える影響が甚大になってきたいま、単に「知る (scio)」ことのみならず、その知識が地球や人間とどのように関わるのかを十分に「わきまえる (sapio)」叡知——サピエンティア (sapientia) へと変換されなければならず、科学技術者は、未来まで全体を見透し

わきまえる叡知の人へと変わっていかなければならない、伊東はそのように主張するのである。これこそが、十七世紀の科学革命以来、今日まで発展してきた科学技術の在り方を根本的に変換するものであり、「叡知革命」と呼ぶべきものというわけである。

我々人類は科学技術の恩恵を受けて生活が格段に豊かになったわけだが、その利益の半面で、地球規模での負の遺産を抱え込むようになってしまった。伊東が言う「叡知革命」という変革の成功如何は、現在世代のみならず、未来世代の人類の運命をも左右すると考えられる。ここにおいて、環境倫理学を中心にその考察が深められてきた「世代間倫理」の問題、それから筆者が提唱する「継世代倫理」の問題に直結するのである。いまや科学技術の問題は、近視眼的ではなく通時的に考えなければならず、そうしなければ人類の破滅を招来しかねないのである。

(二) 「生世界革命(Bio-world Revolution)」——世界観の変革——

「生世界革命」とは、近代科学の基礎を築いたデカルトやバイコンの自然観・世界観を見なおし、世界を「生きとし生けるものの自己組織系」として捉える思想的パラダイムの変革を指す。デカルトの「機械論的世界像」は、自然を生命のない機械とみなし、全ての運動を他律的、因果決定論的に規定するもの

であり、自然の「自律性」と「能動性」を否定するものであった。これにより、自然は人間の支配対象とされ、人間は「自然の主人」として君臨することが正当化された。ベイコンもまた、「知は力なり」とし、自然を拷問にかけて人間の利益のために利用する「自然支配の理念」を提唱した。彼は自然支配を神から授かった権利とし、人間が自然を征服することを正当化した。

しかし、このような機械論的自然観、ないしは自然支配の理念は、環境問題が深刻化した現代では通用しなくなりつつある。「生世界革命」は、この機械論に代わり、自然を自律的で自己組織的な存在として再評価し、自然と人間が共生する新たな世界観を提案する。自然は自らを作り上げる「自己組織性」を持ち、単なる機械や道具ではなく、独自の「自律性」を有する存在であると考ええる。人間もまた、自然の一部であり、自然の支配者ではなく、宇宙、生命体の一環として捉えるべきであると考えるのである。次の伊東自身の言葉を引用すると、自然と人間との関係をめぐる事態がより一層判然とするだろう。

「自然の発展を通観してみるに、宇宙はビッグ・バンから始まって、そのなかに銀河系ができ、さらに銀河系のかなかに太陽系ができ、そこに地球が形成され、その上に生物が生じて、最後に人間が現れてくる。これらはすべて環境

との相互作用のもとで行われる創造的な過程であって、そのつど自己組織化が行われ、新しい秩序が自律的につくられてきた。その過程には、節目節目でどちらともつかない「ゆらぎ」があつて、これが創造的過程にとって重要なものとなる。「ゆらぎ」と「秩序」は排他的なものではなく、「ゆらぎ」があつて、そこから新しい秩序が創られていくのである。こうしたものが自己組織系であつて、これは宇宙の発生から人間の誕生まで、すべての自然の生きた展開過程を貫くものと考えられる」（伊東二〇〇二、五五―五六頁）

伊東の語りは、百三十八億年のタイムスケールを持つ宇宙史、生命史、人類史の中に、自然と人間を位置づけようとする点で独創的である。このような発想は、後ほど紹介する、伊東自身が晩年に到達した「宇宙連関」という思想に通じてくるものであり、そのことを念頭にこの後の議論を読んでいただければ幸いである。ちなみに、伊東が晩年に麗澤大学の比較文明文化研究センター（比文研）で行った一連の講義の名称が「宇宙と人類の歴史―われわれの由来―」であつたことに鑑みても、晩年に至るまで一貫した問題意識を持ち続けていたことがうかがわれる。

以上のような新しい自然観は、自然と人間の共生を可能に

し、現代の環境問題に対処するための新たな視座を提供するものである。「生世界革命」は、デカルト的な「機械論革命」に對抗するものであり、より広範で包括的な世界観の変革を目指すのだ。これにより、人間と自然との関係を再構築し、持続可能な未来を築けるようになることが期待される。

(三) 「人間革命 (Human Revolution)」——文明の変革——

「人間革命」とは、物質的な変革ではなく、内的・精神的な変革を指す概念であり、現代の環境問題に対処するために必要不可欠なものである。この革命は、人間の生き方や文明の在り方そのものを問いなおし、物質的な豊かさや生産の拡大だけではなく、精神的な向上を含む新しい文明の概念を構築することを目指している。

近代以降、文明の価値をはかる基準として、エネルギー消費や生産量の拡大に重点が置かれてきたが、こうした指標だけで文明の高さを測ることはできない。夏目漱石の『こころ』や福澤諭吉の『文明論之概略』で指摘されているように、物質的な進歩が精神的な墮落を引き起こし、現代文明がバランスを欠いた異常なものになっていることが問題視されるのである。伊東は以下のように述べて、文明という概念に含まれる精神的側面について指摘したうえで、環境問題との関連に言及している。

「夏目漱石が『こころ』を書いた時代は、それほど悪いものではなかった。食うや食わずという状態ではなく、それなりの人間の品位を維持した生活が営みえていた。否むしる精神的には、すべて物質化の一途をたどってきている現在よりも、はるかに高いものがあつたといつてよい。にもかかわらずこうした急速な生産や消費の増大が続いているといふことは、文明がむしろバランスを欠いた異常なものになってきているといつてよい。文明の概念にはもともとこうした外的物質的拡大ばかりでなく、内的精神的なものの向上ということが含まれていると考えられる。文明——シビリゼーションという言葉には、シビリテイという概念と結びついて、丁寧さとか礼儀正しさとか端正さとかいった精神的な意味がこめられていた。福澤諭吉は『文明論之概略』のなかで、「文明とは人の身を安楽にして、心を高尚にするを言うなり」といつているが、身の安楽はたしかに大いに進んだが、心の方はますます卑しくなつたといえそうである。何か文明の方向が物質化の側に集中して、精神的にますます貧困化してきている。現代の環境問題は、こうした精神的頹廢とも深く連動している」(伊東二〇〇二、五七〜五八頁)

このような文明における精神的な意味を念頭に、「人間革命」

の核心的ポイントについてまとめると、①「足るを知る」こと、②欲望の制御、③大量消費・大量生産の悪循環を断ち切ること、という三点を挙げることができる。つまり、内的・精神的な充実を基盤としたうえで、その結果として自然破壊を防ぐ外的・物質的な変革を生じさせることができると考えられるのである。結局のところ、現代の環境問題は、物質的な対応策だけでは解決できず、人間の生きる意味を問いなおす「人間革命」を通じてのみ解決が可能であるのだ。この革命は、人間の内面を変革し、文明の軸を精神的なものに移すことで、持続可能な未来を築くための重要な道筋を示しているのである。

さて、ここまでの記述で、「環境革命」の内実について、三つの側面——①叡知革命、②生世界革命、③人間革命から確認することができた。そこで、ここまでの記述で触れることができなかつた問題、すなわち「科学と宗教」ないしは「自然と神」の関係について考察しておきたい。このことは、次の「宇宙連関」という思想にも通じるものであるが、まずはそれ以前の伊東の主張を確認するところから始めたい。

以下の伊東の文章は、『文明と自然』（刀水書房、二〇〇二）の第一部第二章において、「環境革命」における「生世界的自然観」について記述したあとに置かれているものであるが、モラロジーにおける神、あるいは自然の内容にも一脈通じるもの

である。

「もし神といわれるべきものがあるとすれば、この生世界に一貫して働きつつ、それを発展させている生命力のごときのものであろう。神とは世界の外にあって、この世界を創造した超越的なものではなく、この生世界の内において、これを動かしている生命の力という他はないのではないだろうか。そしてわれわれの宗教とは、こうした生命的宇宙との一体感、生世界における生きとし生けるものとの一体感にもとづくといわねばならない。だとすればわれわれにとって神を敬うとは、自然を敬うことに他ならないのだ（Deus sine Natura）」（伊東二〇〇二、四六頁、傍点原文）

このような見方は、「科学と宗教」、「自然と神」という二項対立図式を乗り越えようとする積極的な発想であり、現在生じている諸問題を考えるうえで非常に示唆的かつ魅力的なものであるといえるだろう。最後の「Deus sine Natura」というラテン語はオランダの哲学者・スピノザの著書『エチカ』に出てくる言葉だが、これは「神即自然」という意味であり、今後の科学と宗教のゆくえを考えるうえでの一つのキーフレーズとなることが予想される。

以上のことを念頭に置きつつ、次に「精神革命」と「科学革

命」の統合の問題、そして「宇宙連関」という思想の内容について検討してみたい。

四 到達点としての「宇宙連関」という思想—日本の自然観への期待—

伊東のライフワークとして、「科学史・科学哲学」の研究と、「比較文明・文化論」の研究という二つの道があることに異論はないだろう（伊東二〇一八b、一二頁）。前者の道が「科学革命」の研究に、後者の道が「精神革命」の研究に行き着いたと考えられる。そして、これまでの人類史の歩みを振り返ると、この両者が分離したまま現在に至っている、というのが伊東の見立てである。人類史を牽引してきた、この二つの革命を有機的に統合させようというのが伊東の晩年の狙いであったわけだが、その到達点として描かれたのが、「宇宙連関」という思想である。

この「宇宙連関」の具体的な内容の検討に移る前に、まずは、晩年の伊東自身による「精神革命」と「科学革命」の位置づけ、語りなおしについて確認し、それぞれの革命と「宇宙連関」との関係について考察してみようと思う。ここで参照すべきは、同時期に書かれた「世界宗教と科学」（日本科学協会編『科学と宗教—対立と融和のゆくえ—』中央公論新社、二〇一

八所収）という論考と、「精神革命」と「科学革命」（『モラロジー研究』八一号、モラロジー研究所、二〇一八所収）という講演論文である。この二つの文章が最も体系的に「宇宙連関」の思想を表現していると考えられる。「精神革命」と「科学革命」という二つの革命から、「宇宙連関」の内実に迫ったあと、「科学」と「宗教」の対立的状況への伊東の提言を見てみたい。

（一）「精神革命」からの「宇宙連関」についての考察

まず、「精神革命」についてであるが、「横への超越」ないしは「水平超越」との関係についてまとめられているので、そのことを検討する必要があるだろう。精神革命における到達点としての「善」「仁」「慈悲」「愛」といった概念は、本質的に言って「対人関係の原理」であると把握されている（伊東二〇一八a、三七頁）。それは、他者に対する我々の生き方の行動原理を示しているといい、そのことを伊東は「横への超越（lateral transcendence）」ないしは「水平（方向）の超越（horizontal transcendence）」と呼ぶのである。そして、今日ではこの「横への超越」の対象となる「他者」として「人」だけでなく、「自然」が加わってくることに注目する必要があると指摘する。人と人、人と自然との相互関係が同じではないことが確認されたうえで、ともに「生きもの」の絆を形成するという点で同

様であることが確認されている。「横への超越」とは、「他者との相互関係を自覚し創り上げること」(伊東二〇一八a、三八頁、傍点原文)を意味している。そのことを踏まえたうえで、伊東は従来の「縦への超越 (vertical transcendence)」を無視したり、軽視したりすることはないと考える。しかし同時に「それらのみとどまっていってよいのか」と問題提起し、次のように述べる。

「むしろここでは従来の考え方を一変させ、人と人、人と自然との横の結びつきこそ実のところ、根源的なものであり、これを実現する「横への超越」のほうが第一次的に重要で、「神」や「無」への「垂直超越」はこの「水平超越」を可能にするために二次的に求められたのだと捉え直してみたい。そして今日の文化文明的状况においては、東と西の宗教的対立や、科学と宗教の不毛な拮抗を根本的に超えてゆく、「横への超越」の根源として、「宇宙連関」なるものを新たに提起しておきたいのである」(伊東二〇一八a、三八～三九頁)

このような、「神」や「無」への「縦への超越 (垂直超越)」を第二次として「人と自然」への「横への超越 (水平超越)」を第一次として考える伊東の主張は、宗教者や宗教研究者から

反論がなされる可能性はあるものの、あくまでも人と人、人と自然との「横の結びつき」を重視する伊東の立場がよく表れた言明であり、今後の世界に向けて、宗教間対立や科学と宗教の対立を超えていこうとする伊東の強い意志が感じられる文章である。それでは、水平超越を可能とする「宇宙連関」とは、どのような内容を持つのかを検討してみたい。

以下の伊東の説明が簡潔であるので、そのまま引用したい。

「人と人、人と自然を結びつけ、「水平超越」を可能とする「宇宙連関」(cosmic correlation, kosmischer Zusammenhang)とは、いかなるものであるのか。／それは宇宙のビッグバンから始まって、今日の人類社会ができあがるまでの、素粒子の結びつき、細胞の結びつき、生物相互の結びつき、人間の結びつきを実現せしめている、あえて大和言葉で言えば、「ともいきのきずな」である。この宇宙的規模での連関の構造は、現在の素粒子論や生命論や生態学、動物行動学、認知科学、脳神経科学、「心の理論」などの発達により、きわめて明らかなものとなりつつある」(伊東二〇一八a、三九頁、傍点原文)

まず確認すべきは、上記の「環境革命」論において示された「生世界革命」の考察の際に触れたことにも通じるのだが、こ

ここで宇宙のビッグバンから今日の人類社会に至るまでの「結びつき」の連続性が強調されていることから、「宇宙連関」が、時間および空間の幅を最大限に広げた思想的なスケールを持つ、ということである。このようなアプローチは、自然や人間の相互関係を宇宙論的な視点で理解する試みであり、従来の限定的な生命観や自然観、人間観を超え出ると評することができる。

そのことに加えて、世代を超える視座を提供していることから、筆者の提唱する「継世代倫理」とも親和性が高いと考えられる。筆者は以前から、地球環境問題に関連して、未来世代への利他性や倫理の問題を考えるには、「現在から未来」への時間的なベクトルの向きだけでなく、「過去から現在」へのベクトルの向きを考えるべきであると主張しているのだが、伊東の「宇宙連関」の思想は、筆者の言う「継世代倫理」の構築にあたっての一つの大きな思想的基盤となることは疑いえない。その具体的な考察には、宇宙論や生命論、進化論などの研究が必要になるため、次に指摘する視点が一層重要になる。

つまり、超学際研究 (Trans-disciplinary Research) が必然的に要請されるのである。この引用文のなかで伊東は、素粒子論、生命論、生態学、動物行動学、認知科学、脳神経科学、「心の理論」など、さまざまな学問分野の発展に言及している。これにより、伊東の「宇宙連関」という概念が多面的かつ超学

際的な基盤を持つていることが示されている。これらの分野の研究者が連携することで、「宇宙連関」について、より包括的な理解が可能になるだろう。

さらに、「ともいきのきずな」という大和言葉の表現が注目される。このような言葉を用いることで、宇宙的な結びつきを文学的・情緒的に表現しているといえる。この表現は、宇宙的な規模での連関を、「生活世界 (Lebenswelt)」における身近な感覚として捉えさせる効果があり、伊東の思想がある種の日本的な生命観、自然観に基づいていることが示唆されている。

実は、この「日本の自然観」に関連して、晩年に体系的に示された「宇宙連関」の思想の萌芽ないしは原型が、先に取り上げた著作『文明と自然』(刀水書房、二〇〇二)の段階で確認できるのである。万葉集における自然と人間の位置づけ、万葉集における自然観についての考察のなかで、伊東は「宇宙のなかで、人間と自然は共通の生命のリズム的連関のなかで、互いに照応している」(伊東二〇〇二、七八頁)や、「両者(筆者註・人間の感情と自然現象)は生の宇宙的連関のなかで根底的に相結ばれているといわねばならない」(伊東二〇〇二、九〇頁、傍点原文)などと述べているのである。

これらの言明はまさしく「宇宙連関」の思想の原型であると言わねばならない。伊東が晩年に提起した「宇宙連関」という思想の原型が、それよりも二十年ほど早い段階で日本の自然観

との関連で打ち出されていたのは興味深い事実であり、思想の変遷過程を見るうえで重要なポイントになると考える。伊東は最晩年まで、「日本自然思想史研究」への意欲を示していたが、この分野の継続的な研究については、後進の研究者として筆者自身、伊東の志を継承したいと考えている。

(二)「科学革命」からの「宇宙連関」についての考察

ここからは、「科学革命」に、「宇宙連関」の思想がどのように関わるのかという問題を扱うわけだが、ここでもやはり、デカルトの「機械論的自然観」と、ベイコンの「自然支配の理念」が問題となり、伊東はそれらに対する形で、「宇宙連関」の思想を提起している。該当部分の記述を抜粋して、検討してみたい。

「デカルトのつくった近代科学のパラダイムは、この「思惟」と「延長」の二元論に基礎をおいている。そこにおいてどのようなことが起こったかといえは、まず自然の機械化、つまり自然の「死物化」がある。そして自然を認識する人間は、自らは自然の外に立ってこれを分析するという自然の「外物化」がある（本来人間は自然の一部であるにもかかわらず）。そしてさらに自然からその創発的発展、つまり自律的な自己形成性をまったく奪うこととなっ

た。最後に自然は機械としてその部品、つまりそれをつくっている要素の確認に力が注がれ、すべてをその要素に還元してみる「要素還元主義」に陥ってゆく」（伊東二〇一八b、一六頁）

ここではまず、デカルトのつくった近代科学のパラダイムが、「思惟」と「延長」の二元論を基礎に置いていることが確認され、そこから「自然の機械化」「自然の死物化」に至った事実が指摘される。そして、機械としての自然は、それぞれの要素の確認に力が注がれ、要素還元主義に陥っていくのである。そこで、より重要なのが次の指摘である。

「要素が確定されなければ、それらの関係はないわけだから、この要素探究は疑いもなく重要で、この点でデカルトの「機械論」は大いに力を発揮してきた。しかし現在ではバラバラな要素、成分の確認だけでなく、それらを結びつけてゆくものの研究のほうが枢要なものとなっている。たとえば素粒子論における素粒子と素粒子を結びつける媒介粒子の研究とか、分子生物学の遺伝子相互の関係を研究するエピジェネティクスとか、さらには細胞間の情報交換の研究、霊長類の集団形成、人間同士を結びつける社会脳の研究などみなそうであって、機械論的な要素「還元主

義」(reductionism) に対して、「統合論」(holosophy — 筆者の造語)の必要が要請されている。このような「つながり」の研究をさらに層的につなげてゆけば、それがここで云う「宇宙連関」となるのである。現在の科学は、このように「宇宙連関」をさまざまな局面において研究し、明らかにしつつあると云える」(伊東二〇一八b、一六〇—一七〇頁)

このように、伊東はデカルトの機械論、そして近代科学を発展させた要素還元主義が果たした役割を評価しつつ、現在は、それぞれの要素を「結びつけてゆく」研究——媒介粒子、エピジェネティクス、社会脳などの研究のほうが枢要なものになっていくと指摘している。「つながり」の研究を層的につなげていくと、それが「宇宙連関」になるといっているのである。ここでは、特に物理学や生物学、霊長類学などの自然科学系の学問が参照されているのが特徴的であるが、それは伊東が「科学史・科学哲学」の研究者であったことと無関係ではないだろう。筆者としては、そのほかにも、社会学や心理学、教育学などの社会科学系の学問における「つながり」の研究——コミュニケーション論、援助行為論、信頼研究なども、「宇宙連関」を考察してゆく際に参照すべきであると考ええる。しかし、心理・社会学系の分野では、逆に「つながり過剰」や「依存」の間

題(リアルとネットの両方)が指摘されているため、こうした視点からは「宇宙連関」の思想には、新たな課題が生じることになるだろう。

それでは他方、ベイコンの思想に対しては、どのようなことが指摘されているだろうか。まずは以下の文章を確認したい。

「ベイコンはそれまでのアリストテレスの自然科学のようなものは、たんに思弁的なものであつて、なんら自然に対する支配力をもつものではないことを指摘し、新たに「実験」の重要性を主張し、それによって自然に浸透する「力ある知」(知は力である—scientia potentia)を実現し、自然の上に「人間の王国」を建設しようとした。この精神は、その後の「ロイヤル・ソサイアティ」にうけつがれ、やがて「産業革命」の出現となり、実現された。ベイコンがしばしば「産業革命の預言者」と呼ばれる所以である。ベイコンが望んだ、自然の上の「人間の王国」は今日立派すぎるほどに建設され、我々は近代科学技術文明の果実を十二分に享受している。しかしこの「力ある知」により長く収奪され続けてきた自然は、今や耐えかねてガラガラと音をたてて崩れ去ろうとしているのが、現在の「環境問題」である。従つてここでひとつの問題提起をしておかねばならない」(伊東二〇一八b、一七〇頁)

ペイコンの「自然支配の理念」は、自然の上に「人間の王国」を建設し、「産業革命」を出現させ、人類に対して近代科学技術文明の果実をもたらした。しかし、その半面では、「力ある知」によって収奪されてきた自然は崩れ去ろうとしており、現在の環境問題につながっていくのである。そのうえで伊東の問題提起が以下である。

「現在「科学」はしばしば「科学技術」とよばれ、「技術」と一体化してしまっている。はじめは「科学・技術」と中に点が入っていたが、今ではそれもなくなっている。英語では science and technology としての二つは別物であるが、日本では一体化し、むしろ「技術」のほうに重点がおかれて「科学」が評価される気味さえある。しかしこれは倒錯である。「科学」はあくまでも「宇宙連関」を明らかにしようとする知的行為であって、技術はその知識を利用して人工物をつくり、人間の利便を増大させようとするものである。もちろんこうした技術のもたらす利益も重要であり、それが益々発展してゆくことは確実に予想される。しかしその技術的応用・発展にはまた多くの危険も伴っている。原爆や原発のような核科学の技術的応用、ゲノムの人工的配列による人造人間の製造、人間そのもののロボット化のようなきわめて危ないものがある。その進め

方には十分な注意が必要であろう」（伊東二〇一八b、一七頁）

本来別物である科学と技術が、日本では一体化して捉えられる傾向にあるが、そのことで人間の利便を増すことがあるのは事実であるという。しかし、科学の技術的な応用・発展には、たとえば原爆や人造人間の製造、人間のロボット化など、危険を伴うものがあるので、その進め方には注意が必要であると述べているのは、「科学の倫理学」の課題に通ずるものである。ここでは「科学」とは、あくまで「宇宙連関」を明らかにしようとする知的行為であるという主張が確認できる。そして伊東は、まとめの部分で、「科学」と「技術」の関係、そして「宇宙連関」との関わりについて、次のように述べている。

「筆者の考えでは「科学」はあくまでも「宇宙連関」を研究するものであって、「技術」はその二次的結果として生ずるが、「科学」はもともと「技術」のためにあるものではない。これがペイコンの「力ある知」の理念が浸透発展して強化され、なにかその間に逆転現象を起こしてしまっているのは、改められねばならないと思う」（伊東二〇一八b、一七〜一八頁）

「科学」の実際的な応用として「技術」があるわけだが、ベ
イコンの「力ある知」の理念を押し進めていけば、「科学」と
「技術」の間に逆転現象を起こしてしまう、ということが指摘
されている。やはり、科学の役割は、「宇宙連関」を研究する
ものであることが強調されるのである。

(三) 科学と宗教、その統合への道行き

ここまで、「精神革命」と「科学革命」という二つの革命か
ら、「宇宙連関」の内実について考察してきた。ここで、現代
の世界的問題となっている「科学」と「宗教」の対立状況に対
する伊東の立場を確認しておきたい。

「宗教」と「科学」は、今日ではこの両者の間に「宇宙
連関」という共通項を導入することにより、自ずと統合さ
れるのではないかというのが、筆者が最近たどりついた結
論なのである。このようなアイデアは、まったく新しくて
まだ提出されたことがないから、にわかに入られられる
ことはないかも知れないが、今後いつの日か見直される可
能性はあるものとして、ここに提起しておくのである。／
「宇宙連関」と云っても、それはすでに完成されているも
のではない。これからの研究によって、まだ残っている多
くの隙間が埋められて出来るものである。しかし素粒

子から我々の社会まで、一連のつながりの連続としてある
ことは、「ビッグバン」から「社会脳」の形成に到る進化
の歴史を顧みても、今や疑い得ない確かなところである。
だがいったいこのさまざま段階の相互作用によってい
る、この大きな「つながり」の体系としての「宇宙連関」
は、何がその「つながり」をつくっているのだろうか。そ
れは驚きであるとともに謎である。人格神による「創造」
など信ぜずとも、そこにはやはり何か一種の something
great の力を感じざるを得ない。しかしそれは何も神秘主
義に陥るのではなく、学問的努力によって一歩一歩と解決
されてゆく偉大な事実なのである。「宗教」のところで論
じた「水平超越」とは、この「科学」によって明らかにさ
れる「宇宙連関」の果てにある。かくして「宗教」と「科
学」は統合されるときが来るであろう」（伊東二〇一八b、
一八頁、傍点原文）

従来は「科学」と「宗教」は対立するものとして捉えられて
きたわけだが、これらの統合が可能になる時代がくるというの
が、伊東が後世へ託したメッセージである。伊東は「宇宙連
関」を可能にさせるもの、その「つながり」の根底には「驚き
や謎」があるといい、一種の something great を感じるとい
う。しかし、神秘主義に陥ることはないというのが伊東の立場であ

る。あくまで、「科学」の方法をもって、「宇宙連関」を明らかにすることで、「科学」と「宗教」が統合される未来を見ようとするのである。このような伊東の説明は、廣池が残した格言「深遠の信仰は科学と合す」を想起させるのだが、その統合への道行きには微妙な違いがあるような印象を持つ。この点については、引き続き検討を重ねていきたい（竹中二〇一九、二〇二二を参照）。

(四)「宇宙連関」を可能にする場所とは

さて、本稿を締めくくる前に、「宇宙連関」を可能にする「場所」ないしは「土台」について考察しておく必要がある。それは、晩年の伊東が「コーロロジー (Chorology)」つまり「場所論」について再考する講演（伊東二〇二二）を行ったことと関係する。伊東は哲学史を振り返り、古代から中世にかけての哲学の主な課題が「オントロジー (Ontology)」つまり「存在論」であったと指摘する。そして、近代になって、哲学はデカルトらを中心に、「エピステモロジー (Epistemology)」つまり「認識論」に転換したと分析する。(1)までの時代は、「客観 (Object)」と「主観 (Subject)」が独立的に、あるいは二項対立的に捉えられてきたわけだが、伊東はそのような図式を超えて、主観 (S) と客観 (O) がダイナミックに生成発展してゆく場というものを考えなければならぬと主張したので

ある。

それが、二十一世紀以後の哲学の基盤となるべき「コーロロジー (場所論)」というわけである。そのコーロロジーについて再考した講演の末尾で、伊東は次のように述べていた。

「存在」だとか「認識」だとかといった、そんな静的なものを最初に措定するのではなく生成し発展し、進化していく動的なダイナミックな形成、創生。それを追求する新しい知の在り方がこれからの哲学に求められているものだろう。絶対精神だとか、絶対無だとか、超越して独断的に上から持ってきて、これで終わるといっているのではなく、進化に基づく動的な知を求めるものの基盤をなす、その土台をつくるのがコーロロジーです。二二世紀以後の哲学は、それが基盤となるのではなからうかと、こういう話なんですな」（伊東二〇二二、一三三頁）

このようなコーロロジーという新しい哲学の基盤がなければ、「宇宙連関」は実現されることがないであろう。そのため具体的な「場所」を我々が生きる宇宙に、地球に、国家に、社会に、地域に、家庭に、そして「この私の中」にどう創り、発展させていくことができるのか。そのような課題が、後進の我々に託された伊東からの最後のメッセージである。筆者には

そんなふうに見えるのである。

五 おわりに

伊東俊太郎が遺した研究業績は膨大である。「自然」に関する研究だけでも、本稿で取り上げたもの以外に多数ある。近年の主要な文献を年代順に挙げてみると、「日本における「気」の自然学」（伊東一九九〇、九〇～一一三頁）、「一語の辞典 自然」（伊東一九九九）、「日本人の自然観」（伊東二〇〇二、七五～一四三頁）、「自然」概念の比較思想」（伊東二〇〇二、一四五～二四八頁）、「創発自己組織系としての自然」（伊東二〇〇八、伊東二〇一三、三四～六八頁）、「自然」概念の東西比較」（伊東二〇一三、一三〇～一五九頁）などがある。

ここに挙げたのは、主題に「自然」が使用されているものに限ったが、他の文献のなかでも様々な視点から「自然」に対するアプローチがなされている。さらに、伊東の初期（一九五〇～六〇年代）以降の論考・論文のなかにも「自然」を扱ったものが散見されるため、個々に検討する必要があるだろう。今後は、これらの文献を精査しながら研究を進めていきたい。

本稿は、伊東の志と研究を継承するための第一歩に過ぎないが、その一步を確実に踏み出すことができたかどうかは、読者の判断に俟つほかはない。大方のご叱正をいただければ幸いです。

ある。

参考文献一覧

- ・石弘之・安田喜憲・湯浅越男（二〇一三）『新版 環境と文明の世界史―人類史二〇万年の興亡を環境史から学ぶ―』、洋泉社
- ・伊東俊太郎（一九九〇）『比較文明と日本』、中央公論社
- ・伊東俊太郎（一九九九）『一語の辞典 自然』、三省堂
- ・伊東俊太郎（二〇〇二）『文明と自然―対立から統合へ―』、刀水書房
- ・伊東俊太郎（二〇〇七）『科学の倫理学』へ、『モラロジー研究』五九号、モラロジー研究所、一～二三頁
- ・伊東俊太郎（二〇〇八）『創発自己組織系としての自然』、『モラロジー研究』六二号、モラロジー研究所、一～三四頁
- ・伊東俊太郎（二〇〇九）『伊東俊太郎著作集第九巻 比較文明史』、麗澤大学出版会
- ・伊東俊太郎（二〇一〇）『精神革命』と自然の問題―廣池千九郎の意義―、『モラロジー研究』六五号、モラロジー研究所、二九～三九頁
- ・伊東俊太郎（二〇一一）『精神革命』の時代と廣池千九郎のモラロジー―残された問題としての「自然」―、『二〇〇九年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績―モラロジーへの世界の評価―』、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、一七～二九頁
- ・伊東俊太郎（二〇一三）『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』、麗澤大学出版会

- ・伊東俊太郎(二〇一八a)『世界宗教と科学』『科学と宗教―対立と融和のゆくえ―』、公益財団法人 日本科学協会編、中央公論新社、三三～四八頁
- ・伊東俊太郎(二〇一八b)『精神革命』と『科学革命』、『モラロジー研究』八一号、モラロジー研究所、一一～一九頁
- ・伊東俊太郎(二〇二二)『コロロロジー(場所論)』再考』、『モラロジー研究』八六号、モラロジー研究所、一～一七頁
- ・伊東俊太郎(二〇二二)『人類史の精神革命―ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想―』、中央公論新社
- ・竹中信介(二〇一九)『廣池千九郎の自然観とその現代的意義―科学と宗教の対話、そして調和へ―』、『モラロジー研究』八二号、モラロジー研究所、三九～六一頁
- ・竹中信介(二〇二二)『人新世の時代に自然観を問いなおす―独自の総合人間学の提唱者・廣池千九郎の自然観を手がかりに―』、『総合人間学』一六卷(オンラインジャーナル)、総合人間学会、五九～七〇頁
- ・中村桂子(二〇二四)『人類はどこで間違えたのか―土とヒトの自然誌―』、中央公論新社

註

- (1) 五大革命説の内容については、原則として伊東(二〇二二)の一七～二二頁を参照して、筆者なりの視点を補いつつ要点をまとめている。
- (2) この年代は、現在知られている最も古い人類であるサヘラントロプス・チャデンシスの出現した時期である。
- (3) 伊東が挙げている章末の文献は以下のとおり。E・デュルケム

(古野清人訳)『宗教生活の原初形態(上)(下)』、岩波文庫、岩波書店、一九四一―四二。

(4) この点に関連して、独自の「生命誌」を提唱している中村桂子は、最新の著作(中村二〇二四)において、農業革命や農耕社会の問題点を指摘し、「土とヒトの自然誌」という視点から新たな農業の在り方について考察している。

(5) この部分の伊東の説明では、「農業革命」のあとに「定住革命」が起ったように読めるが、現在は「定住革命」が「農業革命」に先行して起ったとする説が有力である(石・安田・湯浅二〇一三、五三頁)。

(6) 章末の文献は以下のとおり。E・B・タイラー(比屋根安定訳)『原始文化』誠信書房、一九六二。

(7) 以下で検討する文章の初出は、一九九五年である。